

「清水洞の上自然を守る会」の活動報告書

●那珂市五台地区の概要

那珂市は、東京から北東 100 キロメートル、人口 5 万 6000 人、県庁所在都市である水戸市や日立製作所の工場群があるひたちなか市、原子力研究所が立地する東海村に隣接しています。常磐自動車道路の那珂インターチェンジ、JR 水郡線、国道 6 号線、国道 118 号線及び国道 349 号線が南北に通過しています。

市内には、核融合研究所、茨城県立県民の森及び植物園などが立地しています。交通の便が良く水戸市やひたちなか市の住宅地として人口が増加してきました。稲作のほかごぼうやカボチャ、野菜などが特産物になっており農業は主要な産業です。また、市内には工業団地が整備されて有力な企業が進出しています。

五台地区は、那珂市の最も南部に位置しており県庁所在都市である水戸に隣接しています。また、那珂市立五台幼稚園、私立大成幼稚園、那珂市立五台小学校、県立水戸農業高等学校、県立那珂高等学校、茨城女子短期大学が隣接して所在する学園地区となっています。

●清水洞の上地区整備手法

那珂台地からは湧水が豊富に湧き出し、北部は久慈川へ、南部は那珂川へと形成された谷津にはそれを水源とした谷津田が広がっていました。また、谷津の下流には農業用ため池が整備されて、水車小屋も昭和 30 年代まで存在していました。そうした谷津やため池には、多様で豊かな動植物が生息する自然がありました。

しかし、減反政策や機械化に適しない谷津田では休耕が真っ先に始まり、また農業の担い手も少なくなり、結果荒れたままの里山と谷津田が残りました。長い間人の手の入らない、水の循環しない痩せた自然が放置されていました。

30 年ほど前から、地元の心ある方々や地権者を中心に、町に対して（旧那珂町、現那珂市）湧水群を活かした地区整備要望が出されました。町は動植物の分布や湧水等について調査し整備構想計画を作成しましたが、財源難のままお蔵入りとなっていました。

その後、無償借地方式、買収方式など整備手法についての模索があり、整備、管理運営も含めて住民自らボランティアで行おうという機運が盛り上がり、中心的人材も集まり始め、良好な自然環境を次世代に手渡すことを目的に、行政と役割分担をしたうえで行政と連携・協働する整備及び管理することになりました。

●清水洞の上自然を守る会

清水洞の上自然を守る会は、五台地区内の住民を中心に 2010 年 5 月現在 98 人の個人会員と 8 団体会員で構成されています。平成 22 年度の活動状況は、活動日の 20 回の作業には、幹事や理事を中心に毎回 10～30 人内外、延べで 300 人内外の参加がありました。



幹事、理事ともに地域の中心的人材が参加し、地域への影響力は大きいと思います。市とは設立時から協働の関係で、役割を分担しながら連携して自然公園整備のために汗を流しています。また、市内で同様の団体ともネットワークを組んで、ボランティアによる自主的な地域づくりのあり方について相互に工夫を交換しています。

●日本グランドワーク協会

清水洞の上自然を守る会（小菌井博士会長）は、会員になってはいませんが、日本グランドワークのネットワークに入れていただき、登録されています。日本グランドワークのホームページに財団法人日本グランドワークの紹介がされています。

地域内における活性化を目指し、地域の多くの人々が関わって、その地域におけるそれぞれのパートナーの役割と力をうまく引き出し、地域全体の力（地域力）が向上し、自立した地域社会を形成できるように取り組んでいます。

それまでの行政に対する依存体質や住民意識の低下、地域環境の悪化などの様々な課題をみんなで見つめ直し、お互いが対立するのではなく、対等な立場で協調を図り、協力しながら住民自らが行動することで、地域を再生し活性化することに成功しました。

現在では、このような取り組みが全国各地に広がり、それぞれの地域の課題に対応し、多くの地域主体とパートナーシップを組み合わせながら、地域の活性化に向けた活動を展開しています」

●清水洞の上地区整備全体計画

清水洞の上地区整備の全体計画は、第1次から、第2次、第3次と順次行われる計画になっています。計画は、市が行うものと住民自らが行なうものに役割を分担し、協働して行われることになっています。住民は、作業奉仕（ボランティア）で行なう予定ですが、本来は重機を使用しなければならない危険な作業もあり、資金を確保することが必要です。

市も財源難で補助金も十分に期待できないのが現状です。今回の大成建設自然・歴史環境基金による助成金により、第1次計画地域 3.5 ヘクタールのうち、住民が整備する部分である、①地域内 3 千平方メートル内外の竹林伐採処分及び下草刈り取り、② 1 千平方メートルの観察池整備、③地区内物置の取り壊し及び倉庫の再生利用、④東屋（四阿家）の設置、⑤周辺遊歩道・観察池周囲の間伐材利用のベンチの設置、等が計画され実施された事業です。

清水洞の上地区第1次整備計画では、市の分担する事業で 2.2 ヘクタール、5,253 本の除間伐、植栽は 228 本実施されました。住民が分担した竹林間伐及び下草除草によって 3 千平方メートル、1 千本の除間伐が行なわれました。間伐材はチップにして遊歩道敷材料として使用され、また、一部は竹炭原料としても使用されました。また、竹は竹の子として生食用にもなりました。



湧水下部の湿地帯の雑草を排除し観察池の整備されましたので、ドジョウや蛙、メダカやフナなどの小魚も生息が可能となり、食物連鎖の輪が回ってくると思われます。もともと、猛禽類の営巣も確認されており、渡り鳥の渡りも含めて多様で豊かな生物の生息が可能となると思われ、そうした自然を身近に感じながら地域の誇りを次世代へ手渡すことができるものと思われます。

●東屋（四阿家）の設置

東屋（四阿家・あずまや）の建築は、会の幹事で地元の高齢者クラブ会長の野木利三郎さんが棟梁で行われました。80歳を超えていますが、きわめてお元気で、会員を指揮し完成に導きました。野木さんは、東屋を実際には作ったことはないということでしたが、近隣の東屋を見て歩き、寸法を測り写真にとって設計をして、材料を用意しました。

建築物は、後々まで残りますので、「恥ずかしいものは作れない」とおっしゃって頑張っていました。なるべく費用の掛からないように、また材木に新たな生命を吹き込むように、家屋を解体した時の材木をリサイクルして使用しています。

東屋は、四阿とも書きます。辞書を見ると、阿とは、中国語で建物の棟を意味し、四阿とは、四方に棟をもった家屋の名とあります。建築の歴史からすると、初めは四方の壁が少なく、あるいは全く欠き、平面も方形でしたが、庭園の休息・眺望などのために造られるようになると、円形・多角形など自由な平面、意匠が考案されたようです。「あずまや」というのは草屋根などの田舎屋を暗示している事が多いそうです。その「あずま」は辺鄙なところで、都から見て東のほう、つまり現在の関東地方にあたります。簡素な、粗末な、などというイメージでしょうか。公園にできた東屋は心のこもった、暖かい、立派なものになりました。

東屋の周囲の階段を作るのに、ヒノキ材を用いました。そのヒノキの木材は、間伐材を貰い受けて、運搬しました。生木ですので、大変に重量のあるものです。皮をむいて乾燥をさせて使用すると腐食に強くなります。会員のお一人が茨城県の森林ボランティアに所属しており、その方が、竹林の伐採や間伐などを皆さんに指導しました。竹林は込み合ってくると外へ外へと根を伸ばし、隣地を侵食することになります。しかし、間伐をしっかりとやって、管理すると、外へ外へとは伸びずに、竹林の中で収まるようです。良い竹の子も取れることになります。

生木は、乾いてしまうと皮を剥がすのが大変です。鉈(なた)と鎌(かま)で皮をむきましたが、真っ白い肌がきれいに見えるまで熱心に皮むきをしました。現在は、機械で皮をむいているのですが、今でも杉皮(すぎかわ)や桧皮(ひわだ)を取り、神社やお寺などの屋根材に使用するものは手作業による皮むきで剥く場合もあるそうです。

杉皮や桧皮は断熱効果が高く、湿度の調整にも優れているので、日本の建物には非常に適しているようです。杉皮は乾燥が進むと木に吸着し剥きにくいので、山で切り倒した時に剥きます。昔はこの杉皮の売上で伐採費用をカバーできたそうです。林業

にとって良い時代だったわけですが、今回は純粹に皮を剥くだけですから、皮は燃やしてしまいました。皮を剥いて、木の肌が黄色くなっているようですと、皮が少し残っている状態のようで、もう少し表皮を剥く必要があるようです。

東屋の上棟式は、物置前に、仮に組み立てられていた東屋を一度解体し、建築場所に運び、組み立てをしました。四隅の基礎のコンクリートにつけられた印に、四本の柱を立てられて梁が渡されました。重量感がありしっかりとした屋根の姿が現れました。





塗装業をやっている会員によると、しっかりと乾燥した木材に防腐処理をした材料は、100年持つということです。棟梁である野木さんの神事が行われました。四隅に清めの塩と神にささげるお酒が振舞われ、最後に小菌井会長の音頭で、二礼二拍手一拝で、これまでとこれからの工事の安全を祈願しました。

会長の挨拶が行われましたが、地域住民の全くのボランティアで建築された東屋というものは、全国でも稀な例で、誇りにして良いと挨拶をしました。ここまで良くやると満足感があります。皆さんの笑顔が印象的でした。この清水洞の上公園に遊びに来た人々がゆったりくつろぐことができる四阿は、公園施設等には欠かせない存在です。





今後は雨風にさらされるでしょうから大切に管理していきたいと思ます

●ほたる観察池の整備

ホタルが飛び交いメダカが生息する環境をつくろうとする、守る会の方針を実現するために、専門家の方々にアドバイスをいただくため、4月4日の日曜日、「日本ホタルの会」の本多会長はじめ役員の方々に清水洞の上地区を見ていただきました。3月に東京の多摩動物公園で行われた、日本ホタルの会が行った子ども達に向けたホタルの講演に参加し、その際に茨城にお出でいただき清水洞の上地区を見ていただきたいという願いを聞いていただいたものです。

先生方は、熱心に全体を見て回り、さまざまなアドバイスをしてくれました。また、カワナ（先日100匹前後放流していた）が十分に生育し、数も増えていることも確認していただきました。

7月25日には、清水洞の上地区の中心となる東木倉地区の三世代交流に、自然を守る会メンバが参加しました。小学生がホタルの餌になる”かわにな”を小川に放しました。最後にそうめん流しで楽しみました。東木倉地区のさまざまな住民組織である東会・女性の会・子供会育成会の皆様にも協力をいただきました。









●清水寺の大杉

清水洞の上地区には、水戸光圀が開いたという清水寺、町の天然記念物に指定されている大杉があります。



那珂町史による説明板に、「清水寺（東皐山）は、元禄十年(1697年)に、徳川光圀公が明の僧心越禅師のために建立した」と書かれています。住職はおりませんが、本尊は心越禅師が明の杭州永福寺より持参した白衣観音で「清水の観音様」として地区住民の信仰が深いものでしたが、火災で消失してしまいました。

明治2年に、水戸藩の命令で寺を廃して、水戸市の笠原神社から木花開耶姫命（このはなのさくやひめのみこと）の霊を分祀し清水神社としました。

境内の清水池には巖島神社（弁財天）の末社があります。池には、現在でもこんこんと清水が湧き出ていますが、当時はもっともっと豊かに湧き出て、落下する水の流れは「せき竜」と言われたほどだと伝えられています。

池の周りを高さ 30 メートル樹齢 600 年以上の巨杉が厳かに立っています。清水洞の上公園の整備は、地区公民館の建て替えにより、トイレと駐車場の整備が進んでいます。自然公園としてオープンも間近です。那珂市と清水洞の上自然の守る会で、公

園名称を募集しますので、素敵な名称が付けられるはずです。

●協働のまちづくり

那珂市では、市と市民が協働によりすすめるまちづくりを「協働のまちづくり」として、推進しています。市、市民、市民自治組織、市民活動団体及び事業者が、自己の果たすべき役割と責任を自覚し、また、それぞれの立場及び特性を認め合ううえで、相互の信頼関係に基づき、地域の課題解決に対等の関係で連携協力して取り組むこととしています。

行政、市民、地域で活動する団体等が、それぞれの立場や特性を互いに認め合ううえで、対等の関係で、協力し合い、まちづくりに取り組むことだと説明されています。

清水洞の上自然を守る会と那珂市が協定した「清水洞の上地区の維持管理に関する協定書」は、市内で歴史的遺跡や里山や谷津などの自然を守る活動をしている団体と行政との連携のモデルとなっており、那珂市が進める「協働のまちづくり」の先進事例となっています。

添付書類

- 1 清水洞の上地区周辺整備事業（全体図）
- 2 清水洞の上整備事業（第一次計画地区図）
- 3 那珂市商工観光課発行チラシ
- 4 常陽新聞記事（平成 21 年 12 月 13 日）
- 5 日本ほたるの会視察報告書